総合討論

司　会：立本　成文・小杉　泰

小杉　二日間のセッションを聞いての私自身の率直な印象として、この二年間の研究会で、中東と東南アジア、あるいは中東的なるものと東南アジア的なるもの、のすりあう部分とすりあわない部分についての議論が煮詰まってきたように思われる。総合討論では、この二日間の話のみならず、過去の重点領域、の研究で提示された問題点についても討議したいと思う。

地域研究の視角

小杉　今、高谷さんのほうから質問という形で提起していただいた。上岡さんからまずお答えをいただきたい。

上岡　イランの場合、イスラームという基調色があるのは間違いなく、その上にか下にかは分からないが、シーア派という緑系統の色であるが若干異なる色が重なり、それから何色かは分からないが、ペルシャ、あるいは伝統的、歴史的な色がかかっている。パーレビ王朝の時代には、ペルシャの色が主で、イスラームという色が表面には出てくることはほとんどなかった。それがイスラーム革命の後には、一時普遍的な、大文字のイスラームの色が非常に強く現われた。そしてイラン・イラク戦争のときには、両者共にイスラームであるため、シーア派の色が濃くなった。現在のイランでは、シーア派の色と、特に言語についてペルシャの色が主体になっている。ペルシャ語とシーア派であることをアイデンティティーとして、国民をまとめていこうとイラン政府は考えているようである。つまりイランの場合、三つの層があって、それが時代状況に応じてある層の色が濃くなったり、薄くなったりする。この三つの層を常に考える必要がある。

もう一点加えると、今日大塚さんが報告されたような民間信仰のレベルの話は、どこにでもあることではないか。スーダン、エジプトだけでなく、イラン、アフガニスタン、パキスタンなどにもある話である。このレベルの話は問題が別ではないかと思う。逆に言えば、こうした部分に普遍性があるようにも思うが。

小杉　次に大塚さんにお願いしたい。

大塚　今日の私の報告が、大文字のイスラームを中心にして語られていた、と高谷さんは受け取っておられるようだが、私はそれをまったく抜きにしてイスラームを考えるのはまずいと言ったのであり、今日の話はむしろ小文字のイスラームについての話が中心であったと思う。この点をまず確認しておいていただきたい。

次に質問に答えたい。重点領域研究の片倉班の初めの頃の会合で様々な議論が出た。その一つが、高谷さんの世界単位論についてである。そこでは、例えば東南アジアの場合、エコロジカルな要素を基盤にして世界単位を

設定しておられる。しかし、それに対し中国という世界単位の場合は、コスモロジーの共有という視点で括っておられる。エコロジカルに見れば、一つに括ることはできない。中国はコスモロジカルな一つの単位として語られている。

そこで、私達が世界単位を考える際に、エコロジカルなレベルで切るべきなのか、あるいは中国のようにコスモロジカルなレベルで切るべきなのか、議論が分かれた。イスラームを前提として出す場合には、コスモロジカルなレベルになる。このレベルで言えば、東南アジアもイスラーム世界に含まれると私は思っている。一方で、エコロジカルな要素を基盤にした場合は、どのようになるのか。中東班では、私がナイル水系について、また清水さんが大シリア――これに対してはシャームという概念がある――について話をした。また、モロッコの場合も海があって、平原があって、山があって、砂漠がある。大西洋からアトラスに至り、サハラに落ちていく。もともとマグレブという地域があったように、これも一つの統合された地域であるようにも思われた。ここには、やはりモロッコ的なイスラーム、あるいはモロッコ的な社会、文化、生活様式があるだろう。世界単位を考えていく際、今述べたように、中東でもエコロジカルなレベルで分けることも可能なのである。このレベルでは、到底イスラームだけでは切ることができない。ただし、この場合には、ペルシャ、トルコあるいはアラブというコスモロジカルなレベルとは異なる。

このように様々な切り方があると思うが、片倉班は基本的にはイスラームを切り口に議論を進めてきた。その理由の一つには、東南アジアの研究者の方々が私達の班を、イスラームを中心として議論する役割を担う班であると思っておられることがある。それを私達が引き受けた、という側面もあるだろう。今新たに、ペルシャ、トルコあるいはアラブなどの枠組みを取り払って、またイスラームも脇において、エコロジカルな要素を基盤とする単位を考えることも、別な議論の場では可能であると思う。

高谷　今のところは重要である。東南アジアは生態で切っておきながら、中国はイデオロギー、あるいは統治論理で切っている、と大塚さんが言ってくださった。そこの所が大事なのである。東南アジアを生態で切ったから、中国も、あるいは中東も生態で切ろう、ということではだめだと私は考えている。私は先に蝶々的視点と言った。蝶々のように身を翻して、何がその場所の魂を見抜くために有効であるのか、を見出すことが重要だと考えている。私は少なくとも二つの要素があると思っていた。一つは生態であり、もう一つは統治論理、あるいはそのイデオロギーである。しかし、もしかすると、もう二つあるかもしれない。その一つは今までに述べられてきた属人的というようなことである。もう一つあ

るのかもしれない。それはクレオールといった視点である。私はブラジルでこれを感じ、大変驚いた。これは属人的という言葉で表わされるものに近いようだが、ちょっと違う。いずれにせよ、そうした4つほどの視角があって、それによって切ってみるのが世界単位論である。こうした視点に立つときに中東に対する視角はいったい何なのか、ということなのである。生態は妥当ではないと思う。やはりイスラームであるようにも思うが判らない。何を採用したら良いのだろうか。この問いは、地域研究に入っていく最初の入口のように思うのだが。

世界単位の三つの類型

片倉　これまでの私達の研究会の一つの大きな特徴であると思われたのは、通常の研究会では飛び交わないような言葉が飛び交っていることである。例えば、古川さんのおっしゃった「練度」、高谷さんの「パッと捉えるという印象」、そして大塚さんがおっしゃった「アラブ的」、あるいは「アフリカ的」などの言葉である。これは皆、分析的客観的ではなく、総合的主観的である。学問的でないと思う人もいるかもしれない。しかしここにこそ我々の地域研究があると思う。高谷さんがおっしゃった、様々な方向にアンテナを張り巡らし、これまでの蓄積を踏まえての「この場所はこれだ」というような捉え方は、分析的な学問では不可能な、総合的な学問の方向であり、非常に興味深い。こういうやり方で、東南アジアの研究者と中東の研究者の双方が、同じ様に「ここはこれだ」という絵を描くことができれば、それは成果になる。中東班では、何に視点をおくというようなことはさだめていない。しかし中東を捉えようとすると、移動といったようなテーマが自然に出てきたのである。

応地　高谷さんのテーゼは、生態やコスモロジー、あるいはイデオロギー等ではなくて、同じ世界観を共有している世界単位であるということである。そこで中東はどうなのか、と質問しておられるのではないか。

高谷　私の世界単位の定義はそうなのだが、世界観の共有ということを狭義にとるとまずい地域もあると思う。

片倉　そこで、私達は属人的という要素を提示したのである。現在は、ある場所の人々はこう考える、とはなかなか言えなくなっている。同じ考え方をする人々が地球の裏側にもいる時代なのである。それは、面的地域で捉えることができない程の範囲にまで及んでいるのである。最遠にいる人ともコミュニケーションできる時代になりつつある。

田中　世界単位に関連して、もう一つ次の問題を議論する必要があるだろう。大塚さんも指摘しておられるように、高谷さんはたしかに、東南アジアを生態で分ける一方で、中国はコスモロジーで括っておられる。そして、これまでの話では中東もイスラームでおそら

く括ることができる、と思っておられる。世界観を共有するというのが世界単位論の定義としてあるのだが、さらにそのように大きく括る単位が生態的な基盤によってかなり一義的に決まってくる、とも高谷さんは考えておられるようだ。ところが、中東がイスラームで括られるのであれば、その範囲を括ることができるような生態的基盤があるのか、否かについては、高谷さんは何もおっしゃっていない。生態的基盤については、ナイル水系などについてのお話があったように、中東でも様々である。が、それを乗り越えて大きく統合できるような生態的基盤があるのか、それともそれは結局イスラームでしかないのか、という話をする必要があるのではないか。

高谷　結論から先に言うと、私は、結局全ては「エコ・ロジック」にできていると考えている。ナイル流域、大シリア、ペルシャ、トルコ、アラブという世界があることは確かである。だが同時にそれらを乗り越えてイスラーム帯というのが広がっている。田中さんの質問に対しては、そのイスラーム帯を作っているのは砂漠か草原、つまり木のないところであると私は答える。ちなみに言うと、私は三つの生態／世界単位類型の組み合わせを考えている。第一は、砂漠と草原、つまり私が乾燥帯と呼んでいるところ。第二は森。そして第三が森が切り開かれた後の「野」になってしまった所。この三つが基本的にある。そして、それぞれを分析するための視角は別々でなければいけないと私は考えている。森を切る視角はエコロジーであろう。野を切る視角は統治の論理、あるいはイデオロギーだと思う。野とは、具体的には、中国とインドのことを指している。そして、草原、砂漠、海を切る視角を考えてみると、やはりネットワークあるいは属人としか言いようがないメカニズムなのだろうか、とも思っている。

片倉　高谷さんがおっしゃっているのは自然環境決定論ではないのか。

高谷　そうだ。ただし、自然環境を固定的なものとして考えているわけではない。

海田　これまでの議論を聞いていると、東南アジアの方からの報告がまずかったのではないかと思う。古川さんの報告は、東南アジアと言いながらも、島嶼部、あるいは海域世界としての東南アジアについてであった。つまり、海と森しかなかった。東南アジアでも大陸部をみれば、その内側の川沿いには、高谷さんのおっしゃる野の世界、百姓の世界が拡がっている。そこには百姓の論理で作られた小さいクラスター、国家があった。それが統合されて現在に至っているところが少なくない。ビルマでもカンボジアでもそうである。古川さんの報告では、こうした世界が抜け落ちてしまっている。私は、はっきりいって、海域世界というのはエコロジー抜きで理解できるところだと思う。例えば、森の産物をみると、香木や、ダマール、コショウなどの貴重な産物があって、それをめぐって賢い人間

達が、交易でつないでいく都市を中心としたネットワークの世界を形成した。中東も東南アジアの海域世界も共に、そうした世界を形成してきたのである、と言えるのではないか。海域世界というのは、交易ネットワークで形成される世界、つまり人間が作り上げた世界であろう。

家島さんのお話について言うと、中東にネットワーク社会が作られ、それが東南アジアのある部分に重なって、歴史的に展開したということは分かった。しかし、中東に形成された都市、あるいは港市が結ぶ交易ネットワークは、なぜイスラームと重なるのか、あるいはリンクしているのかが分からなかった。

東南アジアの研究者の側が、エコロジーについてほとんど触れないままに、東南アジアはエコロジカルな基盤の上に成り立っている、と言ったために誤解が生じたのではないだろうか。東南アジアがエコロジーに立脚した世界であるというのであれば、ひとまわり大きなイメージを提示する必要がある。東南アジアの海域世界も中東も、共に同じような世界であるのに、「違うのだ」と互いに言い合っているように思われた。

帝国の産地としての中東

小杉　「同じような」と今おっしゃったが、この二日間の討議を聞いて、私はやはり違うという印象を受けた。中東班はイスラームを中心に語ることが使命とされているようで、イスラームについてばかり論じているのであるが、中東が帝国の生産地であることも重要な点である。東南アジアは違う。アラブ語とかトルコ語とかイラン諸語などに分かれているのは、基をたどれば基本的に王朝権力の問題である。アラブ諸国が征服した地帯は最終的にはアラブ化し、新興イスラーム勢力として現われながら、始めから支配者であったトルコが支配したところはトルコ文化圏になり、イランの王朝権力の影響下にあるところは、ペルシャの文化圏なのである。つまり、中東というのはペルシャ帝国に始まり現在に至るまで、延々と帝国の生産地であったという側面がイスラームとは別にある。今述べたような側面についてみれば、やはり中東と東南アジア海域世界は違う。交易ネットワークに関する議論においては似ているかもしれないが、その方向に収斂していくのではないと思う。

高谷　私も今おっしゃったことに全く賛成である。私の場合、中東は帝国の場というよりも、覇者の舞台であると思う。

立本　しかし今のお話は、生態決定論である。

片倉　小杉さんが今おっしゃったことは、正しいであろうが、ここでは歴史的な側面について議論するべきではないと思う。だから、初めに私は現在と未来に焦点をおいて話を進めたいと言ったのである。その文脈において中東について語るときに、どうしても帝国が問題になるのであれば、それを取り上げても良い。しかし、帝国の生産地であった、とい

う話から出発して地域を考えるべきではない。出発点はやはり現在の地域でなければならない。

小杉　私がもともと考えているのは、やはりイスラームの話である。イスラームというのは、メッカで生まれて、マディーナで完成した宗教である。メッカに住んでいたムハンマドの氏族は、遊牧民の伝統を持つ定着した商業部族である。マディーナは乾燥地域における農村地帯である。つまり、イスラームは、定住農民と半農半牧の民と周辺の遊牧民がセットになった地域ででき上がったのである。そうした背景ででき上がったイスラームは、三つの場所それぞれに展開しうる。海もその延長なのである。そうしたイスラームのパターンがあるから帝国も成立しうる、と言いたいのであって、古代から連綿としてあるから帝国に注目するべきだと言っているのではない。ネットワーク構造があって、それに重なって帝国ができる所と、ネットワークはあるが帝国ができない所もある。この点に着目してはどうか、ということである。

属人主義か生態決定論か

坪内　もう一度話を生態決定論の方から引き戻したい。現在の中東をイスラームに注目してみるという視点と、イスラームが発生した地域の背景をエコロジーに関連させて生態決定論的にみるという視点とは、現時点においては別に議論したほうが良い。インドの場合であればカースト、中東はイスラーム、そして――私自身は若干疑問を持っているのであるが――東南アジアは生態、あるいは昨日から話題になっているネットワークなどのように、少なくとも現状において、その地域で一番重要な要素を捉えることから始めるべきであろう。因果論から見ようとする立場からは、今の時点では距離をおいて、それには後々に擦り寄っていく方が良い。

小杉　私は、生態がイスラームを作り上げた、と主張しているのではない。むしろ逆で、イスラームというのは、あらゆる生態を乗り越えるイデオロギーを持っていて、それゆえに中東は現在のようになっている、と言いたいのである。

坪内　とするならば、もう一つ次のことを言っておきたい。イスラームは中東に止まらず東南アジアも席捲するほどに広まっている。これをどのように捉えるべきなのか。つまりイスラームと地域との関連を考える必要があるということである。また、属人的というのは非常に魅力的な視点であるが、地域から浮き上がったとたんに、人間はどこにでも飛んでいき、そしてどこにでも根付いてしまう、といった観を与えてしまう危険性があることも指摘したい。属人的、あるいはイスラームという視点を、地域研究のなかでどのように位置付けるのか、について議論する必要があろう。

小杉　一方の極に生態決定論があり、他方に

地域から浮かび上がってしまう属人主義がある。それらを整理して議論するべきであるという、坪内さんの指摘をもって一旦前半の区切りにして、後半につなげることにしたい。

地域と歴史性

立本　前半に生態決定論の話が出たが、はじめにそれについてコメントする。まず生態決定論と自然決定論は違う、ということを指摘したい。生態には、自然より広い意味があると私は考えている。また高谷さんは、「決定論である」とおっしゃったが、決定論ではない。むしろ生態とその上に乗っているものとの親和性について私達は述べている。単純化して高谷さんはおっしゃっているが、決して従来の決定論について話しているのではない。私達は、その親和性がどのように地域にあるのかについて、これまでに挙げられた生態とネットワークとイスラームを鍵として、単純化して考えようとしている。その際には、分析対象としての生態とネットワーク、イスラームと、分析手段としての生態とネットワーク、イスラームとを区別しなければならない。生態を分析手段として、生態もネットワークもイスラームも切ることができる。ネットワーク、あるいはイスラームを分析手段とした場合も同様である。つまり、この三つの要素を分析手段として用いることは、リアリティーをどのように切るのかというレベルの話である。地域研究は、もともとその全てについてみなければいけない。それが前半の議論では整理されていなかった。高谷さんがおっしゃったのは、分析装置と対象との親和性、つまりある風土のところには、こういうものがある、あるいはこういうものはないという決定論であって、従来の決定論とは異なっている。いずれにせよ、これからの議論では、地域を捉える際に、視点と対象とを区別して考えていく必要があることを指摘しておきたい。

以下では片倉さんが分けた三つの問題点について、まず討論していきたい。一点目は、地域と歴史性の問題であった。片倉さんは、地域研究は現在から未来に向かうべきであると主張された。世界単位論もそうあるべきなのだが、実際には世界単位論に関する議論では、起源や過去の話が混在しており、いつの時代に焦点をおいているのかが明確にされていないことが多い。過去について語るのであれば、東南アジアという地域は存在していなかった。東南アジアは、15世紀前後までは存在しなかったのであるし、その名称は20世紀にでき上がったのである。にもかかわらず、小杉さんがおっしゃった帝国、あるいは権力構造のように、歴史的視点をとらないと見えない地域の側面もある。私達はこの点も痛切に感じている。というのは、中東と東南アジアとを比較する場合には、両者の歴史の深さは全然異なっているからである。これは地域をみる際、非常に重要な点である。例えば、

よく言われるように、東南アジアには統一的な権力が存在しなかったためにバラバラであった。一方中東のほうには権力を中心とする巨大な塊がいくつか存在していたため、なんらかの統一体を語ることができる。この地域と歴史性の問題について、まず片倉さんからもう一度お話しいただきたい。

片倉　立本さんや小杉さんがおっしゃったように、歴史的な部分を考えないと現在の地域も見えない、という側面はたしかにある。しかし、歴史といっても帝国だけでなく、様々な歴史が錯綜して積み重なっている。そこで私は徹底して、現在の地域はどのようであるのか、そして未来にはそれはどうなっていくのか、に焦点をおいて議論していくべきだと考えているのである。それについて議論するために、どうしても必要であれば遡ることにしたい。家島さんのお話のように、空の場所に何かが形成されるところから話を始めたのでは、現在の地域についての議論には、なかなかいきつかない。私達は、そういった始原の姿を問題にするわけにはいかない。たしかに歴史的に見てみることはおもしろいが、ここではそうした視点からあえて離れて、ある種、禁欲的になるべきだと思う。

生態と歴史性

田中　地域と歴史性という問題とは少し別に、生態と歴史性については考える必要があると思う。例えば、高谷さんが東南アジアをいくつかの世界単位に分ける際に基盤としておられるのは、たかだかここ数百年の間に変化してた生態の場合もある。デルタ世界などがそうで、これはこの百年ぐらいの稲作の展開によってできたのである。一方で森の世界は古くから持続して存在してきた。いずれにせよ、東南アジアでは生態が今日的に目に見える形で変化している。ここでの世界単位論は、かなり近過去的な生態変化を基盤にして想定されているのである。一方の中東では、生態はこの数千年間変わらなかったのだろうか。私達は、こうした中東の生態に関する具体的なイメージが浮かばない。つまり、東南アジアの生態を論じる際の時間的尺度と、中東の生態を論じる際の時間的尺度とは違うのではないか、ということである。また、より卑近な例でいうと、東南アジアの自然環境は近代化や開発によって、現在急激に変化している。中東の場合は、環境、あるいはトータルな生態の変化について、どのような議論がされているのか。中東の研究者の間で、その意味での環境、あるいは生態が論じられることはあるのだろうか。あるいは、中東班の方々は、環境あるいは生態についてどのようなイメージを持っておられるのであろうか。そうした点についてうかがいたい。

片倉　中東班で生態を担当しているのは清水さんである。

清水　私は、大シリア、すなわちシャームと呼ばれる地域を中心としてみてきただけであ

り、田中さんの問いに詳しく答えることはできない。シャームというのは歴史的に存在して来た地域で、そこを生態的側面からみてきた。まず気候的な点でいうと、私は最初はエジプトにいたのであるが、エジプトに比べると随分異なる。エジプトはだいたい暑い。水の風呂に入ることができる。しかし、シャームではそれは不可能である。時には雪が降るほどの寒さなのである。イスラエルのイェルサレムやダマスカスでも寒いと感じた。日本のイメージでは中東は暑い場所とされているが、必ずしもそうではない。一方ヨルダン渓谷のように、世界でも最も低い死海などがあり、そこでの高地と低地の気温の差は10度ぐらいある。しかもその間を移動するのにはほんの数時間しかかからない。そういう極端な気候の場所もある。とはいえ、シャームに関して言えば、ある程度は気候的な統一性があるように思われる。しかしながら、果たして中東全体についてそれが言えるのか、否かは――乾燥しているという点では共通しているであろうが――分からない。ただ同じアラブ人といっても、エジプト人とシリア人の気質はまったく異なっている。大雑把に言うと、エジプト人は明るくて、シリア人は暗い。それには生態が関連しているのかもしれないとも思った。

大塚　それは生態決定論であろう。

応地　先の田中さんの質問について少し触れたい。中東のエコロジーの変化はやはり過放牧と関連している。植生悪化に人為的な要因があった、ということが議論されている。例えば、放牧を一切排除し、植林した結果、木が育ったという実験もある。また3000年から2000年ぐらい前の時代には、そうした変化は小さかったという研究も出されている。

小杉　田中さんは、ここ数百年という時間単位での東南アジアの生態の変化について述べられたが、森などは、人間が手を入れても入れなくても昔から存在しているのであろう。それは生態でもあるが、自然そのものであるとも思うが。もし生態の変化について議論するのであれば、今アラブ首長国連邦は砂漠に水をかけて、必死に緑地を作り出そうとしている。まさに現在形、あるいは未来形であれば、環境の変化を論じることができるかもしれない。ところで、東南アジアの生態、あるいは環境についてのイメージが、私達に間違って伝えられたのではないか、と先に海田さんがおっしゃった。それについて、もう少し詳しくお聞きしたい。

立本　海田さんのお話は、今回東南アジア研究者の側が話している東南アジアは、海域ばかりで、大陸に触れていないということである。

海田　つまり、野の世界が含まれていないということである。また、海の世界であれば、生態を抜きでも論じることができる、と私は考えている。すなわち、東南アジアの海域ネットワーク世界は、家島さんがおっしゃっ

た中東の都市がつないでいくネットワークの世界と同じ性質であるように思われるのである。

高谷　いや、やはり異なっていると思う。

古川　私の報告の仕方が、まずかったかもしれない。そのまずかったところを補いつつ、意見を出したい。片倉さんがおっしゃった属人的、属地的という視点は大変興味深い。しかし、背後にある長い歴史の積み重ねというのは無視できない。これまでの歴史で、ある種の高気圧が世界の隅々に拡がっていった。それは属人という視点で捉えることができるかもしれない。その高気圧が、これまでに殺して来た場所がある。それは東南アジアの野であっただろうし、森でもあった。その高気圧の力というのは、中東の役割でもあろうし、また近代化などにもつながっていると思う。それを問題にしたいのである。この問題を捉えるための世界像は、属人的要素だけで地域をみていては、出てこないように思う。

現代と属人的文化

立本　属人について、話題を変えてみたい。というのは、これまで歴史的な地域についての話が主であったのだが、片倉さんがおっしゃったのは、現時点および未来を見据えて地域とは何か、という問題提起であった。今、古川さんがおっしゃったように、グロバライゼイションという大きな動きがある。そのグロバライゼイションのあり方で良いのか、が古川さんの質問であると思う。例えば、国民国家をどのように超越するのかという問題がある。この問題に際して、一方には属人的視点があり、他方にはまだ属地的視点――すなわち世界単位論――がある。片倉さんは属地的視点はもう古い、属人的視点にしようとおっしゃっている。それでは、故郷という考え方はどうなるのか、地域研究はそれで良いのか、というのが坪内さんの質問だと思う。これらの意見を関連させて、地域とは何か、あるいは故郷とは何かについて、属人、属地という視点を絡めて議論していきたい。

大塚　先に中東地域を語る場合、イスラームで良いのかという質問があった。現在、そして未来について言えば、中東地域はイスラームで語ってよいが、東南アジアはだめだと思う。その理由は単純で、中東に住む人間の大多数がムスリムで、東南アジアはそうではないということである。この場合、問題設定の始めから、中東、あるいは東南アジアという属地的な地域で語っている。しかし、もしここでイスラームを主語にするならば、それは中東だけのことではない。つまり、中東とイスラームとは別のレベルの地域であり、イスラームは属人的かつ脱空間的な地域であると言える。もしこの意味でのイスラームを、地域として、あるいは地域研究の対象の一部として認めるのであれば、それは中東という場所に拘束されない。もう一点加えるならば、中東という地域は世界で最初に都市革命が起

こった所であり、またセム的な一神教が発生した場所でもある。つまりユダヤ教やキリスト教の流れの中にイスラームがあるのである。そして現在では、イスラームが最も顕著に現われているのである。ゆえに中東の特性として、属人的、あるいは移動性があるとするならば、中東はセム的な一神教が成立した、あるいは最初に都市——家島さんの言葉で言えば原都市——が成立した場所であるという観点から考えることもできる。だから、イスラームだけに執着しないで、都市的性質、属人的性質というポストモダンの動きにつながる部分に注目して考えていくこともできる。

高谷　イスラーム教の前に、ユダヤ教やキリスト教がある、あるいは中東を中心とする乾燥地域にあるセム的要素の上にイスラームがある、とおっしゃった。その全体を何と言えば良いのだろうか。

小杉　現在は、イスラーム文明でよいと思う。つまり中東の文明の最新バージョンの名がイスラーム文明であると。キリスト教やユダヤ教も、都市の伝統もすべて含めたのが、現在の中東のイスラームなのである。ここでは、宗教としてのイスラームだけを意味しているのではない。

高谷　その場合の中東には、トルコもペルシャも含まれるのか。

小杉　そうだ。

鈴木　その場合の中東は、民族あるいは出自の原図を越える属性を持っていると思う。

立本　今のお話でのイスラーム文明とキリスト教文明とは同じレベルのものか。つまり、イスラームで括ったときの単位とキリスト教、あるいは仏教で括ったときの単位とは同じレベルの単位なのか。

小杉　先に大塚さんも述べられたが、中東を主語にして語るのであれば、中東はイスラームであると言える。イスラームを主語にしているのではない。もしイスラームを主語にして語る場合であれば、そのイスラームはキリスト教と同じ単位である。しかしその場合には、地域ではなく、別の問題について議論していることになると思う。

再び属人的について

片倉　属人と属地という視点について誤解があるように思う。私は属地的な地域を否定しているわけではない。ただ、これから先の世界を考えるときには、面的、属地的な地域だけで地域を考えるわけにはいかない。その意味で属人的な地域という視点を出しているのである。人間が土地に縛られずに、あちこちに動きまわるような世界が、将来あるかもしれない。

立本　しかし、そうしたメタ地域的な地域が、中東には昔から存在していたことがポイントなのではないか。

片倉　そうだ。中東のいわゆる地域的特性を踏えて移動する人々が多かった。すなわち地域でインプットされた文化を持ちながら移動

しているのである。

立本　インプットされた文化というのは、面的な地域に根差しているのか。

片倉　もともとインプットされたときはそうだ。この文化は、先に三番目に述べた故郷の話につながる。ただ、一つの地域だけの文化がインプットされるような人間は、将来的には、相対的に少なくなるであろう。そうした姿を先取りしていたのが中東の人々である。もちろん、中東でも移動しないでじっとしている人がいるが、比較的多くの人々が、複数の場所を旅して、それぞれの地域的特性を自らの器の中に取り込みながら生涯を送っている。

立本　東南アジアについてみるとどうであろうか。

加藤　属人的という言葉で意味したいところは、なんとなく理解できるが、具体的なイメージが分からない。例えば、昨日の話にあった華僑・華人は、マンダリンという言語的なつながりによって属人的な性格を持ちうるのか。また、ある時代の東南アジアでは、ポルトガル語が話せて、自分はポルトガル人であると言えば、その人はポルトガル人であると認められた状況があった。それを属人的というのか。いずれにせよ、これぐらいの例しか思い浮かばない。特に将来を見越して考えるとき、どのようなケースが具体的に考えられるのかうかがいたい。また付け加えて言えば、属人的な要素を属人的なものとしてある程度保証しているのは、属地的な権力ではないか。結局は、属人と属地の共生という点について考えなければ、将来について語るにしろ過去を振り返るにしろ、地域の理解は困難なのではないだろうか。

古川　属人というのは確かにおもしろい考え方である。もし、属人というのが中東の伝統であるとするならば、ペルシャもトルコも含めてデータをバッと集めるとどのようになるのか。

鈴木　属地と属人というのは必ずセットになっているのは確かである。ただし、多くの場合、属地性の強い社会、あるいは地域の場合、属人的なつながりで動く人々はマイナーな存在である。彼らは、故郷をすでに離れてしまった人々で、ディアスポラ的である。属地性の強い地域では、こうした属人的な人々は、全体の体制には全く関係が無いか、少なくとも支配的潮流にはならない。それを支えるものの一つが、規範のシステムである。そして交通のネットワークとそれを支える人のシステムがあるかないか、が大きく関連している。そのネットワークが非常に周辺的に留まっている限りでは、属地的な地域である。そこでの属人的な考え方で動く人々は、ディアスポラ、ないしは漂泊者、旅の商人などで、マイナーな存在になるのである。ところが、中東の場合にはむしろ、遠隔交易のネットワークと、それを通じて動く人間とを統べる規範の体系が、特にイスラーム以降に形成さ

れた。王朝の国境を越えて共有される規範がかなり強固にあった。そうした規範が作られる基には、古代から続く交通の大動脈がある。そこに乗っかかる形で権力も形成され、永続したのであろう。

古川　それは分かるが、属人の時間的な積み重なりというのは、どの辺りから考えておられるのか。イスラーム化以降のことなのか、あるいはペルシャ帝国の頃からなのか。

片倉　遡って考えるのであれば、遊牧が出現した頃からであろう。アラビア半島南端の“幸せなるアラビア”から遊牧民が北上していった頃や、アラビア半島を南下していって海洋民になった人々が、航海者として海の外に向かった頃からの蓄積だと思う。

古川　そう考えると、やはり中東というのは一つではなく、いくつかの部分に分けられることになる。

小杉　私は片倉さんとは、少し違う理解の仕方をしている。つまり、片倉さんがおっしゃっているホモ・モビリタスという属人の側面の他に、私はもう一つの別の属人の側面を考えている。それは、人間にメタ地域的な属性が染み込んでしまえば、それで地域ができる、という側面である。ある場所の人がアラブになってしまえば、それがアラブの国、あるいはアラブの土地になる。その土地が砂漠であるのか緑地であるのか、あるいはその土地で人々が遊牧をしているかそうでないか、には関係がない。それはイスラーム教、あるいはキリスト教以前からのことであろう。とするならば、中東を分けることはできないと言える。メタ地域が属性となって地域ができるような性格が、属人的であると私は考えている。

中東の地域区分は可能か

立本　地理学の立場からこの属地、属人についてコメントをいただきたい。

応地　地理学にはかつてロマン主義的な立場があった。つまり、「これが地域である」と示そうとする立場である。しかし、結局私達が現在達した結論は、そういうロマンはだめだということである。そこで私達は、現在は次のように考えている。高谷さんは決定論であるとか、属地的であるとか述べておられるように高谷さんの立場は一神教的であるが、私の立場はアニミズムである。つまり、私達は生きるということをみるとき、それに関わっている様々なことを、一種の階段のように考えている。家族という単位がある。そして近隣集団がある。さらにグローバルに動きまわる単位がある。そして、各段の機能と必要性と個人の意志決定的な動機に応じて、その階段を登ったり降りたりして、人間は生きているのだと考えている。その階段の下の方だけで動いている時代もあれば、上の方だけで動いている時代もある。そのどれかが地域であると考えるのではなく、全部が人間の生活世界であると私は考える。この生活世界は

重層的なのである。その重層的な世界をトータルにみることなしには、人間の生活を捉えることはできない。だから、その層のうち何が一番大事なのかという議論にはならない。

高谷　重層的であることは分かるのだが、その中で人に話すときに分かりやすいものを一つだけ挙げるとするならば、やはりそれはヒンドゥー世界になるのだろう。同じレベルの議論をするときに、中東についてはどうか。

応地　中東というレベルで考えた場合、一言で言うならば、やはりイスラームであると私は思う。中東の何々村というレベルではなく、中東全体を縛るものは何か、ということであればそうなる。

高谷　家族などの単位を考えるのではあまりにも小さすぎる。

応地　今は、中東とは何かというレベルの問いに対しての答えである。つまり、中東とは何か、と問われれば、それはイスラーム、あるいはイスラーム文明という言葉で表わされるもので良いと言っているのである。焼畑の村、あるいはザグロスの村というレベルで考えるのであれば、答えは違ってくる。例えば、遊牧の世界などの場合には、政治的な組織であるとか、それに根差したテリトリーであるとかが重要になってくる。

高谷　そういう答えでは学者的すぎる。ザグロスの村についての話では小さすぎる。

応地　そうは言ってない。そのように問われたら、という話である。だから中東というレベルで語るのであれば、イスラームだと言っているのである。

高谷　私は次のようなイメージをもっている。山国とゾロアスター教のペルシャ、森と遊牧民のトルコ、商人の大シリア、農民のエジプト、というイメージである。教えていただきたいのは、今述べたようなイメージでこの辺りの世界を考えていってよいのか、あるいはかなり差異はあるけれども、やはりイスラーム世界として括って考えたほうが良いのか、ということである。東南アジアだと、全体としてみればアニミズムの世界である。森と海の世界であるといっても良い。だがその一方で、ジャワとスマトラとタイは違う。だから、ジャワに対してはジャワ世界を考え、タイはまた別の世界として考えている。そういう感じが中東にはないのであろうか。

片倉　中東にもあると思う。そもそも中東という名前自体が、適当な名前ではない。イギリス人が、自分の場所から中位に東にあるからといって、勝手につけた名前である。

高谷　しかし実体があるのではないか。

片倉　それは疑問である。一時期は近東、あるいは中近東とも呼ばれ、時代時代の政治経済の状況で範囲も変わった。バルカンが含まれたり、サウジアラビアが含まれないような時代もあった。だから、中東という言葉をはずそうと考えることもある。しかし高谷さんの文脈に近づいて言うのであれば、やはり一つの地域として考えられる要素もあると思う。

それは生態によるのか、あるいは他のものによるのか分からないが。国民国家という枠組では分けられないことは確かである。ある場所とある場所が、同じであると思うことはやはりある。

鈴木　中東という言葉は、1906年に初めて使われた。その当初は、ペルシャ湾地域だけを指していた。やはり西洋人の勝手な都合で作られた言葉である。それが徐々に西方に拡がり、第二次大戦の頃に現在の中東の範囲を表わすようになった。中東というのは、最初は外から適当に付けられた名称であった。しかし、結果的には一言で括って表わしたいのだが、適切な言葉がなかった範囲が、ちょうど中東という名称で収まるようになった。

高谷　片倉さんのお話では、ある地域は一つに括れそうだということであった。それを素人にも分かるように示していただくと、どのようになるのか。

片倉　例えば、大塚さんが発表されたスーダンの場合は、国としての単位よりも、南と北で分けたほうがイメージがつかみやすい。また、アレキサンドリアなどはカイロとは別にしたほうが良い。このような印象派的な図は、あちらこちらに描けると思う。

小杉　東南アジア研究者の方々にお聞きしたい。現代に近い歴史における世界単位区分の議論で、デルタや海域などは異なっているのだということは分かった。しかし、現在から、未来を志向して議論するときに、中東と、地中海の北側、そして東南アジアというような単位を同じレベルで、マクロに比べることはできるのか。内側に違いがあるのは当然である思うが、それは「内側」の話である。内部にばらつきがあるにしても、未来を志向して語るのであれば、東南アジアは東南アジアであるという、はっきりとした地域性が現われるのではないのか。高谷さんの問いかけは、「東南アジアはこうやって世界単位に分けられるのであるから、中東も分けようとすれば分けられるのではないか」と迫っておられるように思われた。もちろん、その文脈で語るのであれば、大塚さんがおっしゃったような大文字のイスラームと小文字のイスラームで分けられる。

坪内　逆に高谷さんに質問したい。それほどに中東は分けねばならないのであろうか。つまり、東南アジアは分ける必然性が内側にあって、世界単位のような分け方をすれば有効だと高谷さんは考えている。しかし、中東班の方々は、中東を分ける必然性はないと考えておられるのではないか、つまり中東として一括りにしてみるほうが有効だと考えておられるのではないだろうか。

片倉　東南アジアは分けたほうが有効であるとおっしゃったが、何のために有効なのか。

立本　少し議論が錯綜してきたので整理したい。私は地域間研究のできない地域研究はないと思う。地域間研究、地域間比較ができるから地域研究なのである。高谷さんは、東南

アジアは分けれられるとおっしゃった。ではなぜ、東南アジアと中東とを並べて地域間研究をしようとするのか。分けられた小さい区域である小世界の話を持ち出すことはここでの議論には不適当ではないか。

高谷　ただ、どうしてもイメージとしてつかむための議論がしたい。そこで私なりに、山国とゾロアスターのペルシャ、森と遊牧民のトルコ、商人の大シリア、農民のエジプト、というイメージを出したのである。

立本　それは中国に関する議論のときと同じである。中国は黄土とその周辺をセットにして考えた。小世界に分けるものではなく、まとめるものを求めているのである。

坪内　高谷さんには東南アジアは分けたいという意欲が強くある。それに対し、中東班の方々に、分けなくても良いのだという論理が強くあるとおもしろいのだが。

ウサギの目からの見方

掛谷　東南アジアとアフリカとについて議論しているときは、また話が違っている。間にインド、および中東が入ると、東南アジアとアフリカは何となくモゾモゾした感じで似ているという話になる。大イデオロギー、あるいは大宗教のはざまの東南アジアと、そのはずれのアフリカという側面がある。高谷さんの発想は、そうしたはざまやはずれからもう一度世界を見直していこうとする立場から出ていた。その辺りにあるせめぎあいにつながっていこうとする議論であるように思う。

高谷　ある程度は、おっしゃる通りである。歴史的にみるとゾウばかりが威張っている。ウサギの声をもっと聞けという発想がもともとの出発点である。つまり、文明という考え方を何とか爆破しようという考え方である。しかし、地球全体を見てみるとおもしろい。

生態とは別に大イデオロギーというのは、あるべくしてあるようにも思われるのである。それがイスラーム圏であるならば、それは認めておけばよい、というように最近は堕落している。とはいえ、やはり出発点は、はざまからイスラーム大文明圏、さらには近代合理主義、世界システムを爆破したい、という考え方にあった。

掛谷　ウサギから近未来を見て、新しい世界秩序を考えることができるということであろう。その線では今回の議論にもつながっていると思う。しかしこうして議論してみると、イスラームはあるべくしてイスラームなのだと認めざるをえない。そこでの揺れる高谷さんの心自体が、今の議論を形作っているように思う。

高谷　中国は、分けることができないと分かった。中国は5000年も続いた大文明である。これこそ爆破したかったのだができない。仕方ない。中国のように、天子のもとに統合される求心的な力はないが、イスラームも同じなのかもしれない。やはりイスラーム文明圏というのがあると思ってはいる。それを確認

しようとしているのである。

小杉　イスラーム文明圏については語らないことにしたのではなかったか。主語は中東にするのではなかったのか。

立本　中東を語っていると、イスラームを除くことはできないということである。

小杉　述語としてのイスラームであると。

立本　そうだ。

高谷　逆に言えば、今の中東の範囲で良いのか、どこかはずさなくても良いのか、あるいはどこか加えなければならないのではないか、ということである。例えば、アフガニスタンは良いとして、パキスタンは含まれるのか、含まれないのかというような話である。

田中　結局、生態と歴史の蓄積の中で現在の中東地域を見た場合に、属地的にはトルコ世界、あるいはペルシャ世界などがある。ところが、中東地域にはそうした属地的な属性、ないしは小分けを乗り越えてイスラームがある、ということではないか。

高谷　そうだ。それで良いのかと聞いているのである。そしてもし属地的な小世界を乗り越えて、イスラームで括られる地域があるのだとしたら、それは現在言われている中東の範囲でよいのであろうか、あるいはパキスタンまで含めてもよいのだろうか、もっと言えば、中央アジア、ウイグルまでも含まれるのであろうか、と聞いているのである。

鈴木　そうするとイスラーム世界の話に戻ってしまう。

高谷　そうではなくて、どこまでイスラーム世界と考えて良いのであろうかということである。あまり一面的に見ると議論として弱くなる。印象でいうとどういう塊があるのか、と聞きたいのである。

立本　地域研究とは何か、何のために地域を使うのか、というところに議論は収斂すると思う。これについて私自身のコメントを述べる。先に応地さんがロマン主義ではだめだとおっしゃったが、私達のやっている地域研究というのは新ロマン主義なのである。属地的を生態と読み替え、属人をネットワークと読み替え、もう一つ掛谷さんがおっしゃっていた大イデオロギー的な世界の三本柱がある。その三本柱で考えたエコ・コンプレックスが、地域である。それは面的である場合もあるだろうし、そうでない場合もあるだろう。しかし少なくとも、今述べたようなエコ・コンプレックスとして、全体的に地域を考えていく必要があると思う。

地域研究の地平

小杉　これまでは、地域の比較あるいは地域はどのように存在しているのかという、対象について論じてきたように思う。ここで立本さんの提案に従って、地域のあり方をはっきりさせるために、少し視角を変えたい。現在から未来に向けた地域研究をすることによって、世界の各地域、ないしは人類にどのような貢献ができるのか、についての発言をいた

だきたい。

片倉　20世紀は、西洋文明がその普遍性を主張した時代であって、この文明がずっと続いていけば世界中が幸せになれるのだと考えられた。今でもアメリカは、そう考えて政策を作っている。ところが、それでは幸せになれそうにない地域が多く現われた。アメリカが言っている西洋文明の普遍主義(universalism)だけではない、多様な地域で違う考え方をしている人々が大勢いるのだということを明示することが、私達の地域研究の目的である。そこに意味があると思う。

高谷　私も片倉さんと全く同意見である。あのヨーロッパ風のローカルな考え方が、世界に普遍主義として押し付けられてきた。しかし、それでは息が詰まって死んでしまう。やはり、多様な地域、文化があるのだ、とはっきり言わねばならない。ただそこで、どれとどれが一つの単位——それは面でも、線でも、点でも構わない——になりうるのかを示さなければならない。そして、そうしてできたそれぞれの単位の内容を明確にするのが地域研究の目的である。それぞれの単位は皆違った価値観を持っているのであるが、もしそのすべてが共存できるメカニズムを提案できるのであれば、それはすばらしいことである。ただ、そこまでは至らないかもしれない。だが、少なくともこれだけの違う地域があるということを示す分布図を作ることが、地域研究の当面の目的であると思う。

掛谷　高谷さんの意見について、先に田中さんがおっしゃったことと関連させて、少しコメントしたい。高谷さんがエコロジーとおっしゃるときのそのエコロジーは、既存のエコロジーではなくて、未来型のエコロジーであろう。つまり、うまく環境を使っていかないと、地球も人類も消滅してしまうという考え方の中でのエコロジーを主張されているように思う。ありうべきエコロジーを、新たな単位を基に考えていかなければならない。過去のエコロジーではなく、未来のエコロジーをどうするのかについて語っておられるのである。それは人類の最大の問題の一つであろう。地域研究の目的の一つは、やはりこの問題について考えていくことだと思う。

高谷　その通りである。すべての秩序はエコ・ロジック(eco−logic)なのである。今は少しおかしくなっているが、未来もやはり地域はエコ・ロジックであるべきだと私は考えているのである。

応地　今、片倉さんと高谷さんがおっしゃったことに賛成である。地域研究の中で私は、私達が慣れ親しんできた近代化、あるいは近代科学に対して、二つの異なる立場を持ちたいと考えている。近代科学というのは説明を探り、理論などを作ることである。それに対し、これまでの私達の議論で求められてきたのは、多様なる存在の発見である。これは近代科学とは異なっている。それを一つにまとめていくような形で、説明していく立場を

とることが一つ。もう一つは、亡くなった土屋さんのお言葉を参考に考えたことである。近代科学というのは、自分の主観などの主体的な問題を抜きにして、対象が一義的に定められることが前提になっている。ところが、地域研究というのは対象と自分という主体との関わりを、直接に引き受けることが要求される。土屋さんは「アポリア」という言葉を使っておられた。この立場は、論理的には非常に難題である。かつての近代科学では、自分とは切り離された対象を分析して、結果を抽出するという方法であった。しかし私達が考えている地域研究では、多様性を発見すると同時に自分にとっての対象のあり方を問い続けねばならないのである。それを担うのが地域研究であると考えている。

今後の課題

応地　この話とはまったく別で、一つうかがいたいことがある。家島さんのご報告と大塚さんのご報告についてである。大塚さんのお話は、イスラームの地域化についてであった。イスラームにも大伝統的なるものと小伝統的なるものがあり、それは様々であって、その意味ではインドネシアとも比較が可能であるということであった。一方、家島さんは都市の、ないしはイスラームのネットワークの中に、地域が形成されたのだとおっしゃった。家島さんの理解されているような地域の形成と、大塚さんのおっしゃったイスラームの地域化との接点をどのように考えればよいのだろうか。

大塚　私なりの解釈で応地さんの質問に答えたい。私は最初に地域を二つに分けた。それは、空間的な地域と脱空間的な地域である。今日の報告では、私は、基本的に空間的な地域に限定して話をしたのである。ところで、家島さんが定義されたような脱空間的な地域が、地域研究における地域として認められるのであれば、その場合、中東と地域について別の形での議論が可能となるだろう。その場合の主語は、中東ではなくイスラームになる。その時には、私は脱空間的な地域について議論したいと思う。そこで私が対象とする地域は、点と線のネットワークで成り立つ。ただ今日は、空間的な地域の話に限定したということである。中東班の方からこれまでの研究会において、地域研究に貢献できた点があるとすれば、それは脱空間的な地域も一つの地域としてあるのではないか、という提言をしたことにあると思う。

坪内　地域にしても地域研究にしても、蜃気楼のようなものであろう。今回の議論でもかなり近づいたように思われたのだが、また遠くに離れていったようにも思われた。それは問題としている対象の深渕さのせいであろう。ただ、今回の議論ではいくつか鍵が出されたようにも思う。例えば、ネットワークがそれである。ネットワークの問題を地域研究の中に、どのように取り込んでいくのかは重要な

点である。しかし、これはまだ蜃気楼の先に見える一つの点として残しておくべきであって、今はまだ解決するときではない。家島さんのお話にあったようなネットワークの拠点としての都市とその性格について論じるのであれば、今の地域研究の枠内で可能であろう。しかし、ネットワークの線そのもの、あるいはその上を走る船そのものについての議論とは、今はまだ距離をおくべきであろう。それらの実体はまだ捉えられていないからである。このネットワークについては議論の仕方についての研究を重ねる必要があるだろう。また、応地さんが問題提示したような東南アジアで議論されているネットワークと、中東でのそれとは、果たして同じ内容であるのか否かといった問題は、今後の地域研究の一つの大きな課題になるように思われる。今回の研究会でもいくつかの問題が積み残されたままになっているが、それでも蜃気楼が蜃気楼ではなくなっていく方向に、私達の地域研究は向かっているように思う。今後も中東の研究者の方々と協力して、この方向に進んでいけることを望んでいる。

小杉　今の坪内さんのお話をもって、今回の研究会を締めくくりたいと思う。どうもありがとうございました。